

## 風狂

応永元（1394）正月一日～文明13（1481）**酬恩庵**（一休寺）にて88歳で没。  
父は**後小松天皇**と考えられる。南北朝合一後の最初の天皇。歴代で100代目。

「頓智の一休さん」として有名な**一休宗純**の生涯は、およそイメージとはかけ離れて、不安定で乱世そのものでした。度重なる戦争と飢饉と悪疫の流行によって疲弊した下層階級は暴徒化し、各地で一揆が続発しました。庶民生活を全く顧みない足利幕府（室町幕府）は、花の御所の復旧工事に傾注し、勸進猿樂や盛大な花見に興じるほどに驕慢で野放図であったようです。

一休は天皇の落胤ながら、母方が南朝方の出自で身分も低く、ために郊外の嵯峨野に追い出され、ある民家で生まれ育ちます。また、6歳の折りには母とも生き別れ、仏門に出されています。若い頃は『**一休咄**』にあるように頭脳明晰で機転の利く坊主でしたが、壮年から晩年にかけては、権力と癒着して腐敗した宗門を相手に、破戒僧と呼ばれた逆説的な批判精神を発揮し、**風狂**の僧として存在感を示します。「風狂」とは、見せかけだけの偽善者に対抗するためなら、法を曲げてでも闘うような反骨精神を意味します。いわば毒気の強い異端児と想像してください。

一休17歳の頃の名は**宗純**。師の**謙翁宗為**〔西金寺〕の一字をとっております。25歳の折り、師の**華叟**〔禅興庵〕より『**洞山三頓**：トウザンソト〕という中国の教えを解くように命ぜられ、苦心の揚句、悟ろう、悟ろうともがくほどに悟りからは遠くなる、という逆説的な境地に至りました。その悟りの一首は下記のもので、**漏**（ロ）とは煩惱のこと。意味としては、「悟った者からすれば、有と無はわずかな隔たりで、中間で一休みするという境地が悟りである。風も雨もいかなる災難も厭（いと）うものではない。」ということです。師の華叟は**一休**とい号名を許しました。

有漏地(ウロチ)より無漏地へ帰る一休み 雨ふらば降れ 風ふかば吹け

## 大徳寺

北区紫野大徳寺町 臨済宗大徳寺派の本山 宗峰妙超（大燈国師）が創建

一休が生まれる少し前、時の権力者**足利義満**は「五山の制」を定め、**南禅寺**（臨済宗南禅寺派大本山）を別格の最上位に置き、その下に鎌倉五山と**京都五山**（**天竜寺**、**相国寺**、**建仁寺**、**東福寺**、**万寿寺**）を列しました。五山は政治・経済・文化などのあらゆる面で幕府権力との癒着が甚だしく、肝心の禅を忘れ、教学をもてあそび、詩文を楽しむ貴族趣味的な僧侶が圧倒的な状況でした。

以前は**大徳寺**も五山のうちに並んだこともありましたが、その地道で純粋な禅風が疎まれて、その後、十刹（ジッツツ；五山の次位の十箇寺）の第9位に格下げされました。さらに、永享3（1431）には自ら幕府に願い出て、官寺から除外されることになり、望んで私寺の立場に立っていました。

護法精神旺盛で頑なと申しますか、融通が利かないと申しますか、周囲の者はもてあましたと思われまふ。その中で一休は別格の破天荒さとともに、内面を喝破する力を示しておりました。

こうして権勢から遠ざかった大徳寺は、主として京都や堺の町衆に支持される禅寺となっていきますが、五山に比べて自門の勢いは芳しくなく、当然、財政的にも潤ってなかったようです。一休の師である華叟の禅興庵も謙翁の西金寺も大徳寺派ゆえに貧乏寺そのもので、従って、一休自身も衣食の資をかせぐために、寺で調製した薬草を京の町へ売り歩くなどをしております。

## 彷徨

一度目：応永 21（1414） 一休 21 歳の折り

二度目：文安 4（1447） 同 54 歳の折り

一休は二度にわたり死の縁に立っております。

一度目は師・謙翁が亡くなった直後です。一休の謙翁に対する思慕と畏敬の念は尋常ならざるものがあり、それゆえ無二の善師を失った一休はたとえようなない絶望のうちに突き落とされたようです。抛り所を失って石山観音に7日間の参籠を続けたが、なお深刻な絶望感は癒されず、ただ呆然と瀬田の大橋の上を歩いていたとき、ふと死を思い立ったのである。投身しようとしたまさにその瞬間、後ろから抱き止めた男がいました。男は何と生き別れた母の使者でありました。都から遠ざけられ、我が子からも引き離された母でありましたが、落胤の我が子の身を案じて、追手の影から守るべく使者を配していたのです。歌舞伎的一幕にでも使えそうな場面ですね。

二度目は大徳寺の僧が自殺するという事件が引き金でした。この後、宗門内で派閥争いが生じ、数名の僧が投獄されるというスキャンダルに発展したようです。超然とした禅風の大徳寺らしからぬ事態ですが、一休は悲嘆のあまり讓羽山（現在の大阪府高槻市出炭：ユズリバ）にこもって、絶食による死をもって宗門の腐敗を批判しようとしていました。結果としては、大徳寺の再興のためにという声に推されて翻意しております。尚、81歳のときには大徳寺の住持に就任しています。

## 狂雲集

一休が編んだ詩篇としては、『自戒集』（62歳）・『骸骨』（64歳）・『狂雲集』（87歳）が残っております。老境になってからますます盛んという感じです。一休にしてみれば、人前でひたすら禅僧らしさを保とうとする空しい体面意識だけが、事実上、世の禅僧たちに形式的禁欲を強いているに過ぎない。所詮禁欲が体面の問題なら、体面にとらわれて生きようとする偽善の人生のほうが、よほど禅僧らしからぬ不純な生き方となります。従って一休は、偽善を打ち破るためにはあえて偽悪者の構えも辞さずに、何のためらいもなく淫犯肉食に携わっております。

『狂雲集』では、教えのようなものを当然記しておりますが、出色な点は紅樓淫坊や酒肆での歓楽の様子が頻出することです。34歳の頃には実子をもうけたようでもあり、禅僧・岐翁紹偵がその人だと言われております。この紹偵もなかなかの遊び人として、一休ですら手を焼いたとも伝わっております。親子の仲はままならぬということでしょうか。

『狂雲集』は、最晩年を共に暮らした森（シ）という女性についても詳らかに記してあります。盲目の旅芸人で40歳ほど下ということですが、最初の出会いは一休が76歳の冬でありました。この頃は応仁文明の乱の真っ最中でして、戦火で寺が焼かれる度に、一休も転々と居場所を移していた時期です。森の哀調を帯びた艶歌に聞きほれたと記してあります。そして翌年の春、摂津住吉で再び邂逅し、互いの気持ちを確かめ合い、そして結ばれたのである。森との恋は、いわゆる茶飲み友達というような、淡々とした老いらくの恋ではありませんでした。それは燃えさかるような官能性をすら交えた情熱の恋でありました。これより後、一休は森をそばに置いて愛し、森も一休の身の回りの世話をする侍者となりますので、森侍者と呼ばれるようになります。

木しばみ葉落ちて更に春を回す 緑を長じ花を生じて旧約新たなり

森也が深恩もし忘却せば 無量億劫 畜生の身 …… 森の恩に感謝する一休です。

## 発光

一休と相前後して、この中世という時代は傑出した僧を輩出しております。一休より少し前だと、**法然・親鸞・栄西・道元・日蓮・一遍**がおり、そして同時代になると、**夢窓・兼好・蓮如**がおります。錚々たるものです。まさに日本の精神史における黄金時代です。

中世は世情不安定な地獄のような時代でもありました。どうやら順境にあるときは人間を駄目にし、逆境にあるときに磨きがかかるようですね。生命の危険にさらされたとき、人間の精神は不思議なくらい燦然と発光する。肉体の滅びとしての死の現実を目の前にして人はおのずから、精神においてひたすら死の克服を図るしかないと思われるのです。

## 蓮如

一休と蓮如との交友関係も有名ですが、

21歳下の蓮如とは、年齢の差も、さらには宗派の相違も超越して、強く結びついたようです。

蓮如の父は本願寺7世・**存如**で、その母の召使いの某女に手をつけて生まれた子が蓮如です。存如が正妻を別に迎えたとき、某女は自分がいては将来蓮如が苦境に立つと案じ、我が子の姿を絵師に描かせ、それを持っていずこへか姿をくらましたそうです。蓮如6歳のときです。

蓮如は継母の如円にことごとく辛く当たられた。結婚し、子供が生まれても、いつまでも部屋住みに据え置かれ、食事にも窮するほどでした。従って、40歳を過ぎても法主の地位につけず、ともかくも耐えぬいてきた人である。後の本願寺8世の勇姿からは想像もできないくらいです。

不遇な、そして優れた母を持ったということ、そしてその母と共に暮らすことができなかったことが、この二人を近づけたのでしょうか。一休が若い日に修行した堅田が、後には蓮如の近江布教の根拠地となったことも、この二人を強く結びつける絆となったのかも知れません。

思えば一休は幸せ者といえます。蓮如のように自分の命のどん底まで知ってくれる友を持つことができ、この世に人と生まれた甲斐もあったというものです。さらにまた、森侍者という佳人にも恵まれたのですから、いかに風狂の一休であっても、たぶん不満は口にできないでしょう。

仮名草紙『**一休咄**』が世に出たのは、一休没後170余年を経てからです。これは底知れない人間的魅力が庶民に与えた影響の大きさを物語ります。伝説的な生命力の強さからすれば、死後250年くらいを経て『義経記』に結晶化した源義経に次ぐものと言えるのではないのでしょうか。

### 瞽女 (ゴゼ)・小林ハル (人間国宝、102歳)

日本の伝統芸能に確固たる足跡を残してきた視覚障害者は多数おられます。衛生観念も低く治療もままならなかった時代では、目を患い、視力の無いままに一生を送る人々の数は、現代よりはるかに多かったと想像されます。

瞽女や琵琶盲僧の世界は、担い手たちの高齢化とともに、時代のかなたに消え去ろうとしております。小林ハルさんは、三味線音楽を基本とする盲目の瞽女の一人でした。近世から昭和期に至るまで、山深い山村にも芸能を届けてきた女性だけの芸能集団です。娯楽の少ない時代、小林さんらの歌と演奏は、人々に楽しみを与えてきたのです。

過日、吉川英治文学賞が伊集院静氏『ごろごろ』に決まりましたが、あわせて文化賞の受賞者の一人として、小林さんが決まりました。受賞理由は、瞽女歌の伝承と普及に尽力したことです。